

みんなの未来きこう



発行: 特定非営利活動法人全員参加による地域未来創造機構
発行責任: 半澤彰浩



写真は、川崎エリア「市民基礎講座」フィールドワーク「自然堂」にて。



自然堂で月に1回活動して
認知症サポーターに渡すロバのマスクづくりを行う
ロバ部。ロバのような大きな
耳で、認知症の人やその家
族の声に耳を傾けよう!

未来機構は、
2022年11月30日に
NPO法人となりました。

受講者の声: 地域のつ
がりやコミュニティづくり
によって解消される問題
は多くある。一步を踏み
出す力になりました。

キャリアアップ講座 来年も開催します!
(ZOOM併用)詳細はホームページで!

2023年4月からメンタルヘルス、発達障
害、コーチング、コミュニケーション等をテ
ーマに専門講師による講座を開催します。



**<湘南エリア>「市民基礎講座」(1/30~)
「リーダー講座」(2/20~)開催します。(詳細はHPへ)**

~地域を豊かにするために~**市民基礎講座**

1/30(月)、2/3(金)、2/10(金)、2/15(水)

<4回連続講座> 10:00~12:00 受講料3,000円(4回)

- 私たちの生活を取り巻く社会の現状と近未来
- 地域の居場所やたすけあい活動の実際(事例)
- 地域をキャンパスに一子育て支援の取組み
- 地域・生活にある「自分ごと」についてGW
- 実際の活動現場でフィールドワーク
- 振り返りと今後の活動について

会場はどちらも
大船POP-UP スペース
鎌倉市大船1-12-10
湘南第5ビル
*JR大船駅徒歩3分

地域を豊かにする リーダー講座

2/20(月)、3/1(水)、3/8(水)、3/15(水)、3/22(水)

<5回連続講座> 10:00~15:00

受講料5,000円(5回)



(特非) 全員参加による
地域未来創造機構
(略称: 未来機構)

〒222-0033横浜市港北区新横浜2-8-4 オルタナティブ生活館3F
Tel:045-534-7131 fax:045-534-7151 e-mail:minnano@miraikikou.org

<https://www.minnanomiraikikou.org/>

地域を豊かにする アソシエーション活動交流会開催！

地域で日頃から子ども食堂や居場所などの活動をしている市民団体、ワーカーズ・コレクティブなどの交流や情報交換の場面づくりとして開催しました。横浜市8団体、川崎市1団体、藤沢市1団体、鎌倉市2団体、座間市1団体と、合計13のアソシエーション・市民活動団体の皆さんにご参加いただきました。まず、活動事例紹介としてお二人の発表から。
(取材：大池玲奈)

※アソシエーション：共通の目的や関心をもつ人々が、自発的につくる集団や組織。

あるきっかけから地域の居場所へ

一人目は(特非)てとてと陽だまりの植木美子さん。10年前から横浜市港南区で「おむすびや」や「おしゃべりカフェ」など地域の居場所を開いています。活動のきっかけは現在17歳になる息子さんが小学校に入った頃、街で見かけたある親子の姿です。携帯片手にベビーカーを押していたお母さんが、つまらなそうな顔をしていたことが心に引っかかりました。「子育てをするお母さんが楽しくなるような街にしたい」と思い、まずは子どもと母親を対象にした居場所を始めました。居場所をきっかけにつながりが出来た連合町内会、社会福祉協議会の方と話をすると、どうもあまり反応が良くない。「子どもとお母さんじゃないと参加できない」ということが、地域の人たちを遠ざけてしまっていたのかも、、、。「やりたい」ではなく「やります」と宣言する

そこから、誰でも集える居場所として「食」を通じてつながる「おむすびや」やカフェの運営も始めました。地域のおおぜいを巻き込んで、パワフルで魅力的な植木さん。地域でつながるコツは「やりたい、ではなくて、やります、と宣言すること」。そして実際行動してみることで、いろいろな人が関わってこられるようになるというお話は、どんな活動にも通じるものだと思います。



拠点づくりもみんなで



商店街・区役所との合同イベント



食を通してつながる



バケツで稲づくり



通称：みろくじハウス



公園でも「居場所」はできる！

今は「みろくじハウス」で

子どもの余白の時間を大事に

二人目は(特非)ふじぼけの小澤由加里さん。空き家だった一軒家を4団体でシェアし、ふじぼけは週に一回子どもたちが放課後に自由に遊んだり勉強したり好きなことをする場を提供しています。特別なプログラムなどはありません。「1日学校で頑張っているんだから、放課後くらい余白の時間を大事に伸び伸びさせたい」という小澤さんの想いに共感します。

建物がなくても居場所はできる

2017年に開始した当初は藤沢市の「市民の家」で開催していましたが、コロナ禍で利用が難しくなり、その後2年間は近隣にある公園で毎週子どもと遊びました。夏の暑さは大変でしたが、公園で2年間活動したことで「建物がなくても居場所はできる！」という自信につながったそうです。参加しているスタッフは、職種も年代もバラバラな、子育て当事者ではない地域の様々な大人たち。先生とのタテの関係でもなく、同級生とのヨコの関係でもない、地域の大人や異年齢の子どもとのナナメの関係がとても重要だと小澤さんは言います。そして「子どもを真ん中につなげる居場所」は大人もつながる居場所になっている、とのことでした。

「ワールドカフェ」で交流

植木さん、小澤さんの発表のあとは、ワールドカフェ方式によるグループトーク。一定の時間が経ったら席を移動して、おおぜいの人と交流できるのがワールドカフェの魅力です。3つのテーブルでそれぞれ3つのテーマに沿って意見交換・交流を行いました。

これまでの活動の中で、感動したこと、よかったこと

★引きこもりがちだった30代男性が居場所に参加するようになり、子どもから鬼ごっこをしようと手を引っ張られ、気が付いたら一緒に遊んでいるのを見たとき。★活動を開始した5年前から継続して参加してくれている子どもがいること、80代のボランティアスタッフが辞めずに続けていること。★家にこもりがちな高齢者が毎月1回はここに来ると決めて出かけられたこと。★食堂に来たお母さんに「ここにきてご飯を食べると、子どもと笑顔で接することができます」と言ってもらったこと。★「亡くなった母の生きがかった」という娘さんの言葉。★独居の人が歌を歌い声を出すことで元気になったこと。★居場所は自分たちのためにやっているようなもの、などなど。皆さん、それぞれがうんうんと頷きながら聞いていました。



これまでの活動の中で困ったこと、いま困っていること

多かったのは「本当に必要な人が来てくれているのかモヤモヤする」そして「敷居が高い、入りにくいと言われる」でした。

◇子ども食堂に自分の家できちんとご飯を食べられそうな人が、ママ友と連れ立ってやってくる。◇特に困っているふうでもない人に私たちがご飯を提供するのは違うのでは？ついそんな気持ちになってしまう。◇地域のいろんな人に来てほしいのに「何をやっているか分からない」「入りづらい」と言われてしまうことが悩み…に対して、◇「来てくれる人がいる。それが答えだよ」という話、◇「カフェとか食堂など目的がハッキリしていることや、誰を対象にしているかが分かるほうがいい」◇「男性の参加が少ない」といった悩みには、◇子ども食堂+学習支援で男性も巻き込めるとか、それぞれの経験からのお話も出てきました。

また、◇来る人が「お客さん」になってしまってなかなか参加の主体がつかれない、◇生活に困窮している人への支援制度は大人にはあるが、子どもにはない…といった考えさせられる話もありました。

これからめざしたいこと、今後やってみたいこと

ここで出てきたのは●「もっと地域や外部の団体とつながりたい」●「多世代に広げたい」●「学生や男性に関わってほしい」●「公園を使う視点をもっとひろげたい」などの声でした。

自分たちだけで出来ることには限界があり、活動をきっかけに地域を少しずつ巻き込んで、よりよい社会をつくっていきたいという参加者の想いが伝わってきました。



想いは同じ、生き生きと暮らせる地域にしたい

居場所のテーマは違って、みんなが生き生きと暮らせる地域にしたいという想いは同じで、とても有意義な交流会になりました。参加者からの感想にも「とても楽しかった」「また開催して欲しい」という声があり、次回開催時にはより多くの皆さんに参加いただければ幸いです。

日本政府は、2010年に開始した高校無償化制度から、在日朝鮮人の民族教育機関である朝鮮高校の生徒を排除した。国連の人権機関からは朝鮮高校生の除外を「差別」と断定されは正を求められ続けているが、政府はこれを拒み、新型コロナウイルス感染対策で新設した教育・生活支援制度からも朝鮮学校とその生徒を除外するなど、朝鮮学校を対象外にする方策を取り続けている。「学校保健法」も「学校給食法」も対象外のため、保健室も給食室もないという現状にある。
(取材:野村美湖)

そんな日本にあって、今年、川崎朝鮮初級学校(2歳児～小学生)で給食を作る市民ボランティア団体、**동그라미(トングラミ)**が立ち上がり、活動を開始した。代表の平賀 万里子さん、ボランティアに参加している吉田 みつるさん、インタビュー場所をお借りしたふれあい館の崔 江以子(チェ カンイジャ) さんにお話を伺った。

元々日本と朝鮮をつなぐ在日の歴史に興味があり、新大久保の高麗博物館でボランティアをされていた平賀さん。同じ日本に暮らしながら、学校給食法の適用対象外で給食がない、という日本の国策による朝鮮学校の子どもたちへの差別を知り、何か自分ができると考えていたという。

ふれあい館を運営する社会福祉法人青丘社の理事長三浦知人さんに、「市民で給食を提供する活動がしたい」と相談したところ、「おお、いいな!ぜひやれよ!」との賛同を得て、三浦さん、木瀬慶子さん、趙 弘子(チョウホンジャ)さんと4人で、동그라미(トングラミ)。韓国語で丸・円・いつまでも切れることなくつながる、の意味)を立ち上げた。「ヘイトスピーチを許さないかわさき市民ネットワーク」の集会での、ワンコイン500円の会員・給食作りボランティア会員の登録呼びかけを皮切りに次々と賛同が広がり、今では無記名も含めると会員は200人を超えるが、常にパンフレットと手作りの会費納入袋をセットで持ち歩き、会員拡大の声掛けも欠かさない。



月1回の朝鮮初級学校での昼食づくりのボランティアは、近隣からも、遠方からも駆けつける。「トングラミがあるから参加できる。アットホームで楽しい」という。

廊下に並んだ小学生に配膳する市民ボランティアのみなさん

「トングラミ」の活動は月1回、15人程の市民ボランティアで生徒38人+先生やボランティアも含め60食をつくる。月に1度、生徒のお母さんたちで作る「オモニ会」の給食と被らないように献立を調整して決めているが、直前に提供された野菜などの食材でおかずが増えることも。切り干し大根やアジフライなど、普段の食卓では口にしないような献立もあり、良い食育の機会にもなっている。崔さんは、「中高生くらいになると、差別されること、そしてそれを諦めることが当たり前になってしまうが、こういった市民活動とのふれあいの経験が、在日の子どもたちが人を信じる力、投げ所になると思っている」という。

吉田さんが、「80歳になってもあるんだな、何とも言えない気持ち、声をかけてくれた人に感謝しています」と、知識ではなく現場に来て自分の目で見て確かめることの大切さを語ってくれたのも心に残った。



打ち合わせをする平賀さん(左)と吉田さん



校内の掲示板には市民団体「トングラミ」の紹介が



2歳児用の昼食



小学2年生の教室で

追加参考資料(東京新聞) : <https://www.tokyo-np.co.jp/article/197985>

発行: 2022年12月20日

発行者: (特非) 全員参加による地域未来創造機構(略称: 未来機構)

〒222-0033横浜市港北区新横浜2-8-4 オルタナティブ生活館3F

Tel:045-534-7131 Fax:045-534-7151 E-mail:minnano@miraikikou.org